

服飾造形における技術的研究（第3報）

—アンサンブル・スーツの製作—

山本高美，山本 政

A study on the Technical Features of Costume and Art (Ⅲ)

—The Making of Ensemble Suits for Formal Wears—

Takami Yamamoto and Masa Yamamoto

目的 従前製作したフォーマルドレス数体の研究から、着脱せずにアフタヌーンドレス兼カクテルドレス（ロング）として着装するには、デザイン上たくし上げが不可欠であることを確認した。しかし、長時間アフタヌーンドレスとして着用した後、ロングドレス着用に切り替えた際に出る、胴囲からミドルヒップラインへかけての“しわ”が課題であり、その解消について、特にリフォームによる研究を行うことにした。

方法 裕長着をほどき、裁断されている（身頃、袖、衿、共衿）各々の用布について詳細に寸法の測定を行う。その際、どのように区分裁断されているのか、また、ふくれ織りに点在する模様の配置がどのようなになっているかなど把握する。それらを踏まえ、デザインをアンサンブルスーツとした。課題のしわ対策として①デザイン面では、ワンピースの着丈調節位置をローウエストの切り替え線にし、ブラウジング風に着装することとし、②素材面ではしわを念頭におき、材質を吟味し総鹿子ふくれ織りの高麗撚御召を選んだ。この布地の繊維は経、緯とも強撚糸を使って織り上げ、その後でしばだし精錬をしているため、しわになりにくいことを想定したものである。③縫製面では、接着芯に重点をおき基布がニットのアピコ（旭化成）を使用した。これは、伸縮性がありしわになりにくいことと、やわらかい風合いで仕上げることを考慮したものである。

結果 少ない着用実験結果ではあるが“しわ”についてはほぼ解消する事ができたと思われる。また、別布を補充した点では、ファッション性を添えた美的な造形ができた。

和服のリフォームは、構想と技術面の合致という点で難度の高い物であることを痛感した。しかし、技術面では、前回研究の示唆を得て損耗した布への対応もでき、また形成、構成、補助効果など造形面での研究ができた。

キーワード：服飾、被服製作、リフォーム、アンサンブル、スーツ

緒 言

アフターヌンドレス兼カクテルドレス（ロング）として、着装可能なデザインは、おはしより風のたくし上げが不可欠である。その事は、以前数種類の素材や構成方法による服飾造形の研究を行い、且つ着用実験を通しての結果である。既に紀要にも報告した通り、たくしあげ自体はデザインの又、機能面や形態面にも問題はなく、衣服を着脱せず服装形態を変えられる訳で、まさに実用的機能と礼節機能を兼ね備えた合理的スタイルと言える。しかし、その為に出る胴囲からミドルヒップラインへかけての“しわ”は、殊に和服のリフォームにおいて課題を残した。

前回研究の中で和服のリフォームは、素材の有効活用という点で経済性を加味し、フォーマルウェアとしての合理性を更に高めた。例えば、布地の表現性にしても外観効果・造形効果は高級感をかもし出し、着心地も良く、シンボル機能と実用機能を巧みに表現できる。所が、この合理的デザインの為に生じるしわが目立つ。特に、ショート丈で長時間着装しロング丈に早変わりすると、たくし上げ位置の形態安定性（伸縮・圧縮・しわ）に支障をきたす。中でもしわは、整容性能面からいささか課題である。そこで今回は、しわを解消する事を主軸にし、一方、機能面の合理性や素材の経済性、加えて服飾の美的造形を融合したドレス形態を探り製作を行った。

研究方法

1 資 料

衿長着の表を使用する。布地は、“総鹿子ふくれ織りの高麗撚御召”である。この資料は前着用者の訪問着を染め直して、紋様をたどり日本刺繍をほどこし長年愛用した。その後、刺繍を取り除き色あげし、縫い紋をつけて再度茶道用として用いた。その後、30年余り箆箆に眠っていたものである。膝のあたりは生地が薄くなり、また日本刺繍の針跡や、仕上げ作業の糊付けなどによる損耗は否めない。しかし、しわになりにくい材料として選んだものであり、写真1に示す通りである。

2 布地の点検

“ほどく”作業中に体型とデザイン、和服のパーツと紋様を検討しながら造形案を立てる。表地は損耗の他に、肩や脇に日やけや保管による色あせ部分が見られた。

紋様は、大柄の飛び紋様であり、一方方向である。尚、衿長着としての柄合わせは、後ろ身頃では右身頃が上向きの紋様で、左身頃が下向きの紋様になっている。また、衿長着の表

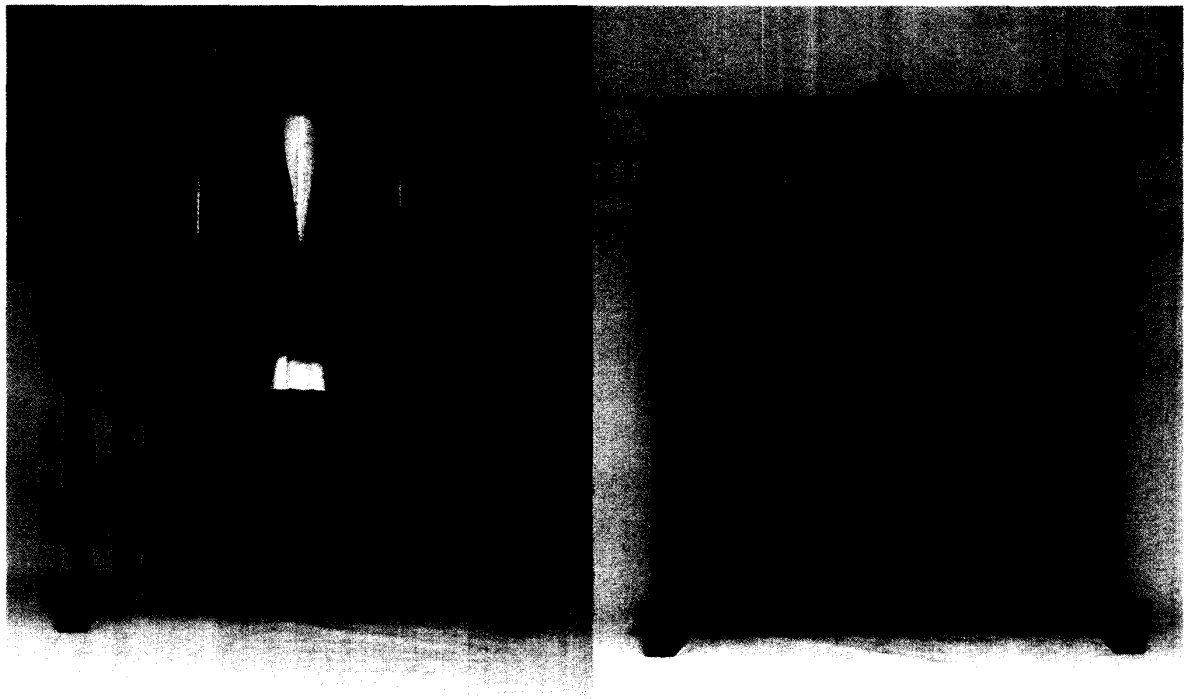


写真1 資料の裕長着

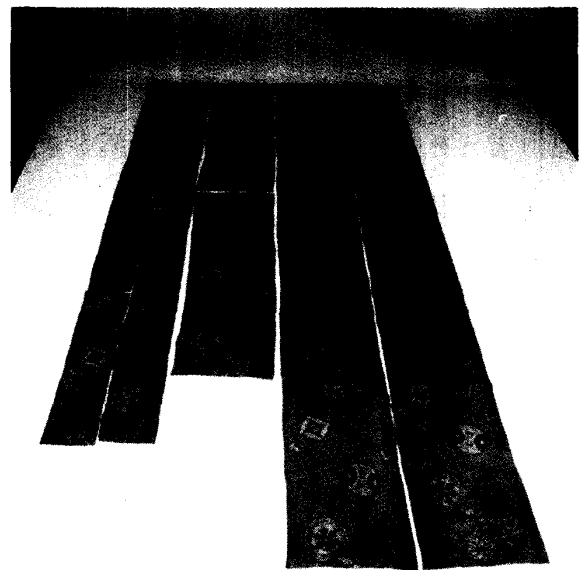
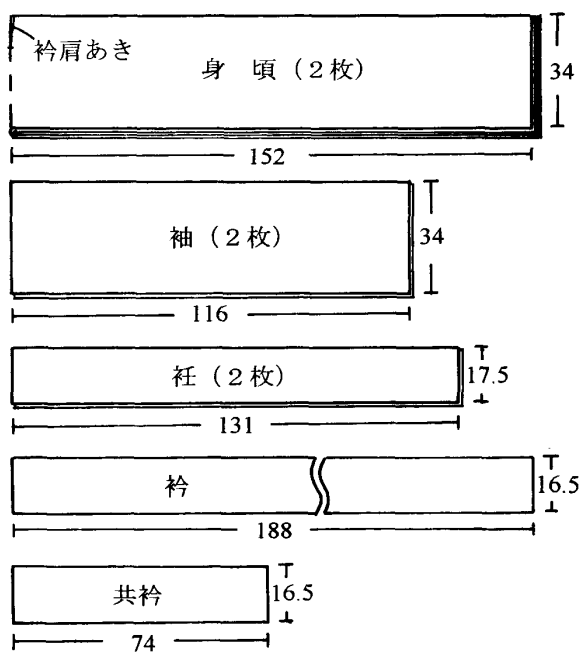


図1 裕長着の表身頃裁ち切り寸法

写真2 裕長着をほどいた表地

地裁ち切り寸法は、図1に示す通りであり、裕長着表地のそれぞれのパーツと形態、紋様は写真2に示す通りである。

3 デザイン設定

布地を点検し、確認したデーターを基に、アンサンブル形式のフォーマルスーツを製作する事にした。着脱せずに丈の調節が可能である事は勿論であるが、ジャケットを脱いでワンピース・ドレスのみでも美的に着装できるようにデザインとハーモニー・ファッション性を考慮し、別布を補足することにした。そこで、縫製上の工夫も考慮に入れた。

ジャケットは、衿をウイングカラー風とし広いラベルにスベアーカラーを配し、前打ち合わせは2つボタンとした。袖は、ヨークスリーブとし、袖口にスリットを入れ8分袖としても着装できるデザインとした。

ワンピース・ドレスは、後ろ明きにし、ボタンで止める。袖は7分丈でヨークスリーブにし、ウエストラインはローウエストの切り替えとした。トップの部分に別布（絹100%のバックサテン）を用い着装はブラウジング感覚でおはしよりし、着丈をロングからノーマル丈に調節する。ボトムは、左裾に長めのスリットを入れ、歩行時に見え隠れする足元が、顕わにならないように別布で装飾技法を行った。

4 製図と仮縫製

1) 製 図

和服によるリフォームは布地の幅、用尺、柄行などによる制約が多い。そこで、綿密な測定値と採寸を行いこれ迄の研究データーを基に作図を行った。ジャケットは、紋様を生かし切り替えを少なくした。また、布幅を考慮し胸ぐせ分の切り開き位置を顎ダーツとした。ラベルの切り替え位置も布幅の関係で下げた。逆に、ワンピース・ドレスのトップは洋服地で幅が広い為、制約されない作図ができた。図2～4に示す通りである。

2) 仮 縫 製

用尺の限られた布を最大限に利用せざるをえない和服のリフォームは、マーキングが必須である。このマーキングの是非を明確にするのが仮縫製であり、実物でロスの少ないレイアウトができる。そこで、表地の物理的性能を考慮し、シーチングによる仮縫製をした。全体のシルエットは予想通りであり、補正はわずか細部の修正に留まった。

5 本 製 作

1) 裁 断

和服の生地自体、織物の幅が34～35cmと狭く、且つリフォームの為各パーツに分かれその上、本製作の表地が、一方方向大柄の飛び紋様である。また、和服の柄あわせと洋服の柄合わせが違う事も影響し、パターン配置は予想通りは無理であり、先ず布の柄位置を図5に示すようにイメージデッサンした。本材料は各パーツの用尺と紋様が定まっている為、フルパ

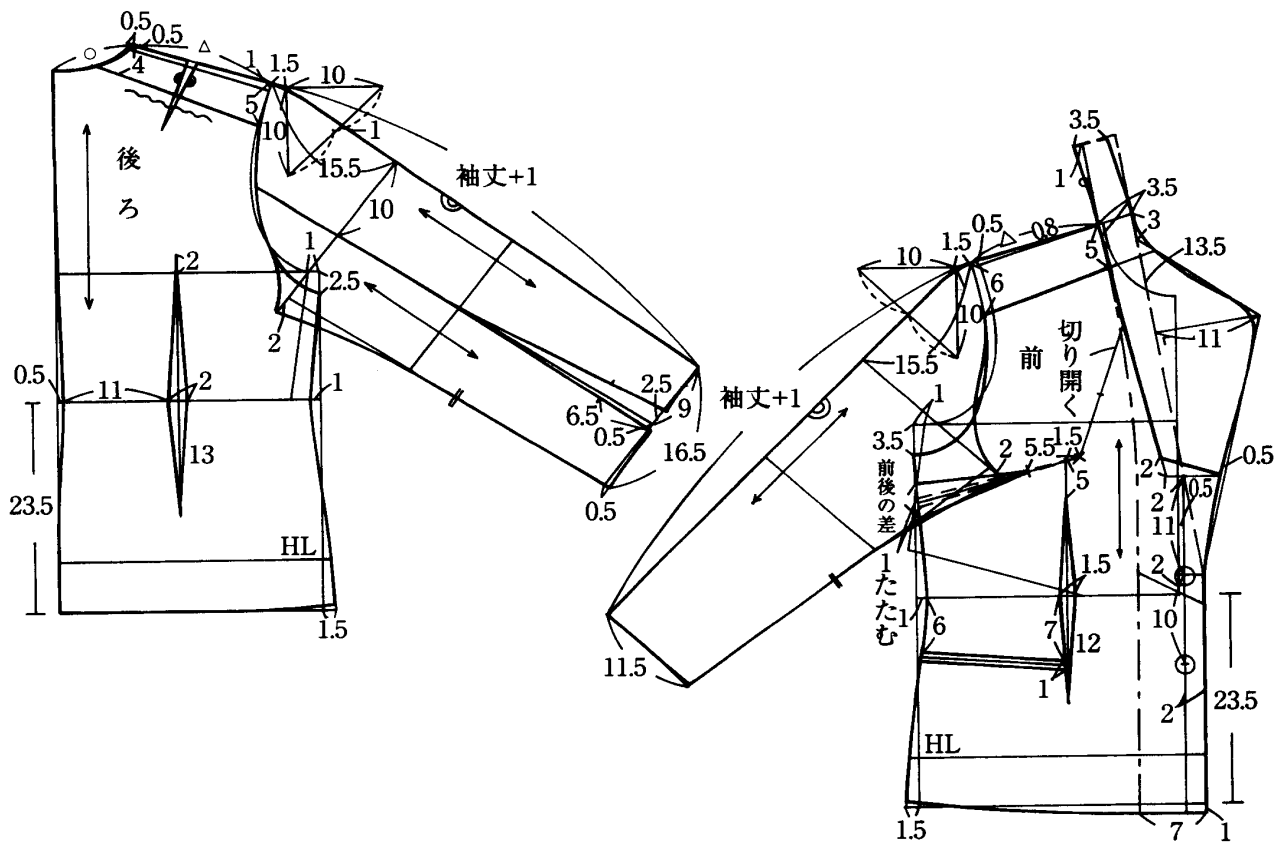


図2 製図 ジャケット

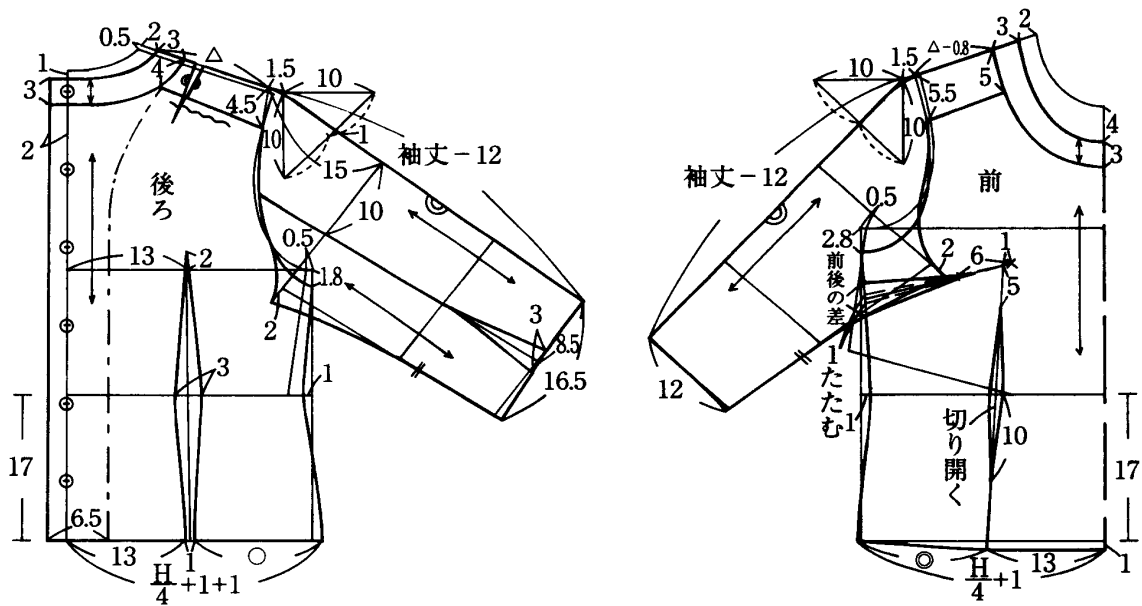


図3 製図 ワンピーストップ部分

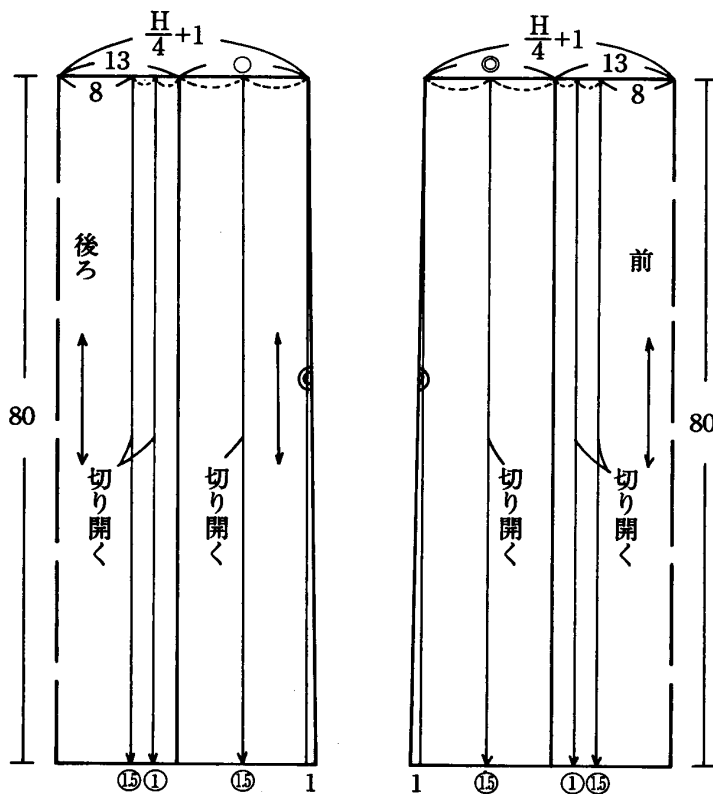


図4 製図 ワンピースボトム部分

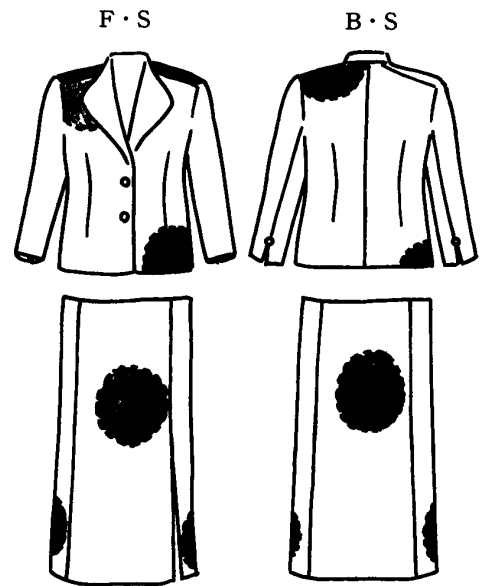


図5 柄合わせのイメージ

ターンを作成し図6のように量産方式によるマーキングを行った。ボトムでは、デザインがアシンメトリーの為、別布も全パーツをマーキング方式で裁断した。図7に示す通りである。

2) 仮縫い

仮縫いでイメージ通りのシルエットになることを勘案し、接着芯は旭化成のアピコ100番と200番を使い分けた。接着方法は、バキュームプレス機を使用し、芯張りをした後、仮り縫い合わせを行った。

試着した結果、ワンピース・ドレスの衿割りが変形し、トップの丈も不規則に伸びた。絹のバックサテンは比較的重量感を添えているものの、硬軟感である腰と張りは弱いことが再確認された。そこで、衿割りに表地を使用する切り替えを入れた。おはしより位置の切り替え線では、トップとボトムを交互に1cmずつ調節を行い訂正した。ジャケットはヘムの余裕分でやや丈を長くした。そこで、表布使用量が最小限ですむ玉縁ポケットを配し、利便さをもはかった。写真3に示す通りである。

3) 本縫い

ワンピースのボトム部分、スリットに別布で見返しを付けた。写真4に示す通りであり、

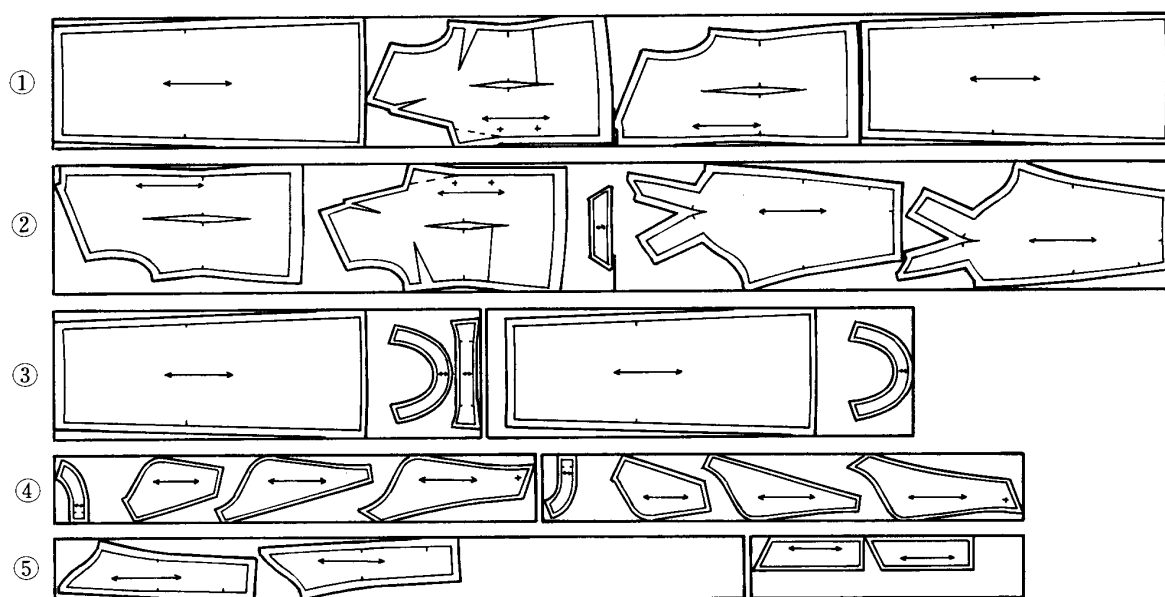
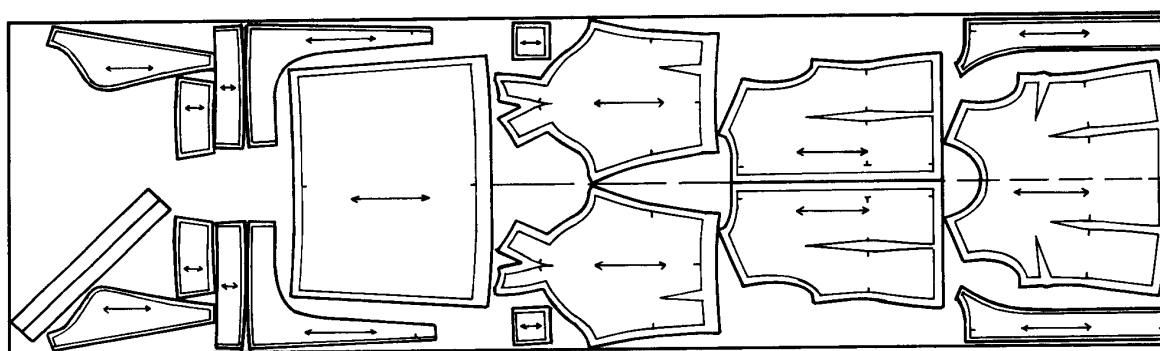


図6 表布マーキング

※和服の場合の裁ち切り図名称は、図面上部から①②が左右半身の前後身頃、③の左右図が袖、④の左右図が衿、⑤が衿と共衿（掛衿）である



90cm幅、3m

図7 別布（バックサテン）マーキング

これは、蹴回しの不足分であり、歩行しやすいためのスリット丈である。縫製は、保型性およびファッション性を考慮し作成した物である。

ジャケットのポケットは、前ダーツと脇縫い目に挟む形とし、和服着用時の名残として、ポケットの向こう布に縫い紋を残す縫製をした。袖口は写真5に示す通りであり、ワンピースの裾と同様に別布で見返しを付けた。着用時カフス感覚で袖口を折り上げることで、8分袖としても着装できるようにした。袖は、ヨークスリーブであるが前腋から後腋位置の縫い代が立つよう吟味し、縫製手順で袖の据わりが良くなるように工夫した。また、衿のイメー

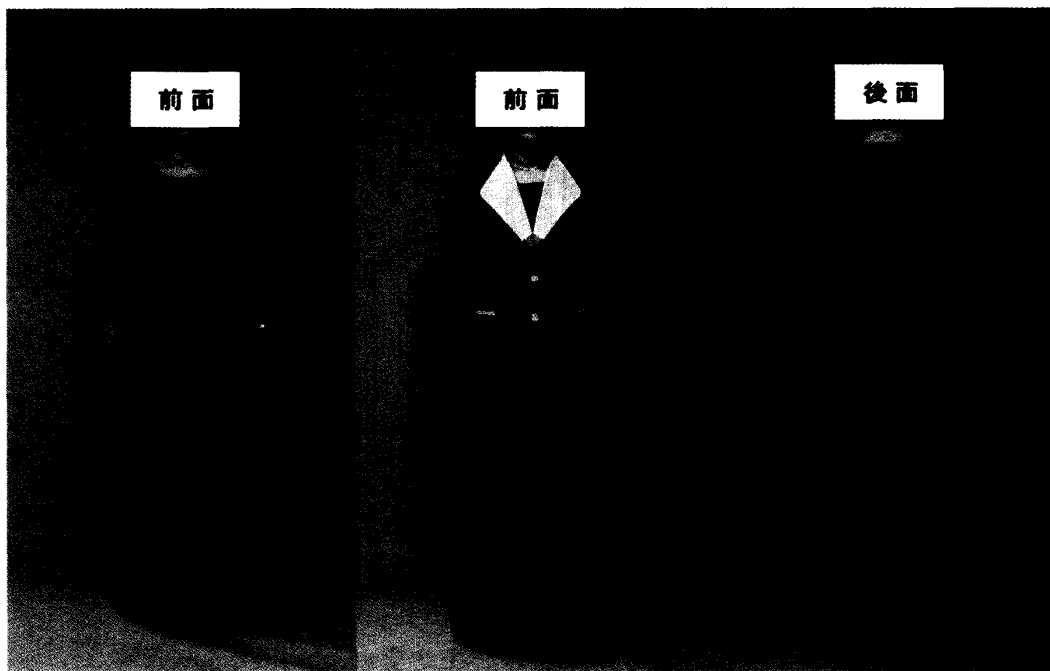


写真3 仮縫い



写真4 ボトムスリット

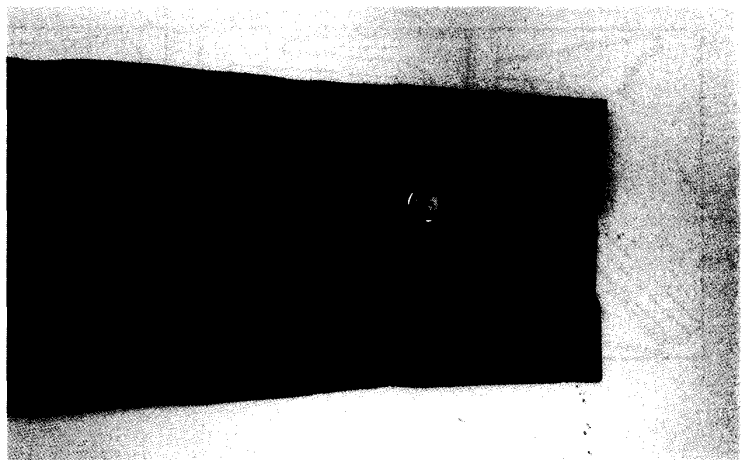


写真5 袖口スリット

ジを変え着装の雰囲気に変化を持たせようと、スベアーカラーや装飾品としてのコサージュを製作した。スベアーカラーは、二重衿の感覚で着装する事をイメージし、更にリバーシブルに縫製した。写真6に示す通りで表地（高麗撚御召）と別布（バックサテン）を用い、ラ

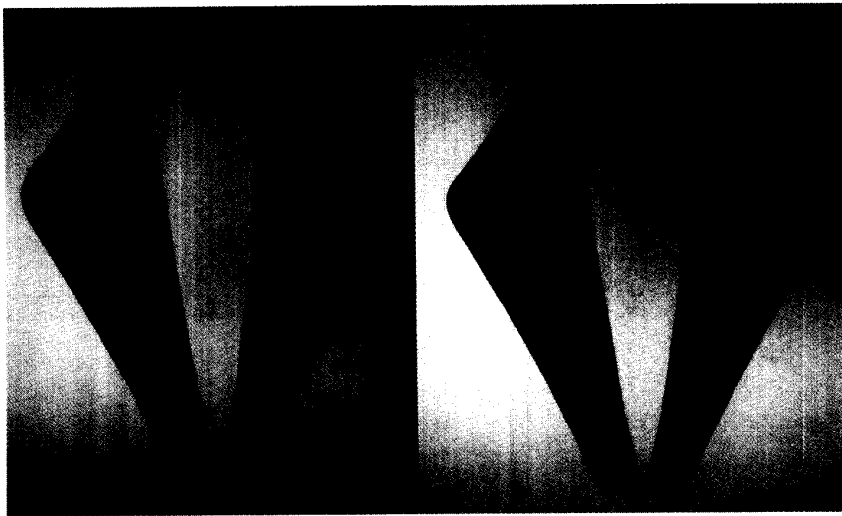


写真6 スペアーカラー



写真7 コサージュ

ペルの外側をパイピングで仕上げ両面着用を可能にした。ラペルの内側の縫製は着装時の返り線（ゆとり）を考慮し表地と別布をそれぞれロックミシンで仕上げた。コサージュは、花びらに残り布の表地と別布を使用した。別布のバックサテンは、裏の光沢を利用し華やかさをかもし出した。写真7に示す通りであり、基本的には花びらの表面を表地、裏側を別布としたが、一部別布が表になるようアレンジした。花芯には金色のペップ、葉も金色で市販の物を使用した。

考察と結果

1 形態安定性（しわ）について

1) デザイン面から

課題の“しわ”は、ワンピースの着丈調節位置である。そこで、ローウエストの切り替え線にステッチをかけ、細い紐を2重にし門止めでつなげ、ボタンホールとした。その為ウエストラインを緩やかにボタンがけする事で、スカート丈を調節できる。着装形態はブラウジングする形となり、布を極度に締め付けない。この縫製による補助効果については、着用実験後課題のしわがほとんど見られなかった事が示唆する所である。

縫製方法と着装法の工夫がマッチして、着丈の調節を写真8に示すように、ブラウジング風におはしよりする事で、トップ部分のしわを防ぐことができたと思われる。

2) 素材面から

洋服着用時の“しわ”については和服の材質選びがポイントであった。選択した和服地は、繊維や織り方は本来の高麗撚り御召しの手触りと異なり、縮のような風合いを持ち、楊柳御

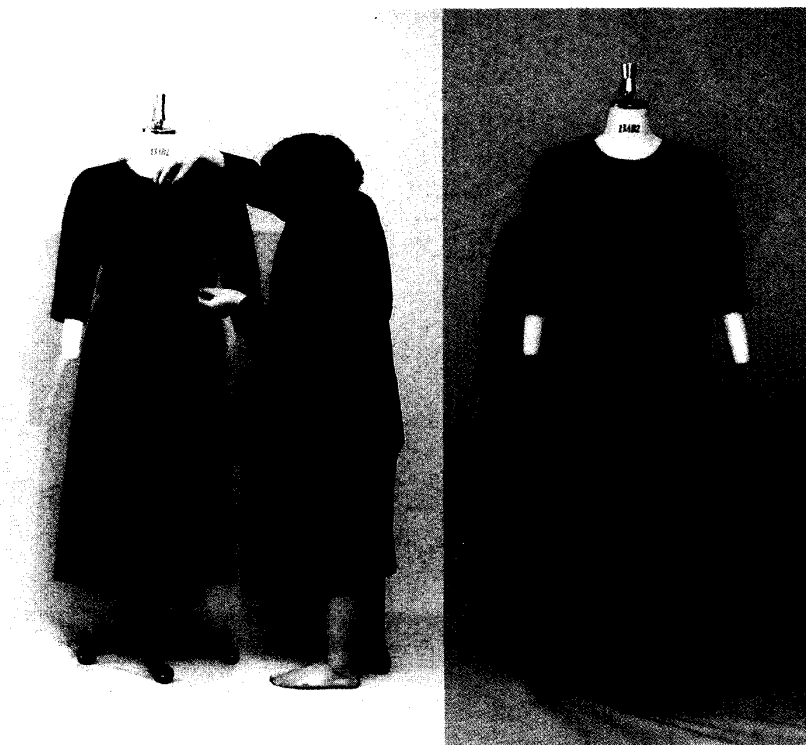


写真8 ドレス丈の調節方法

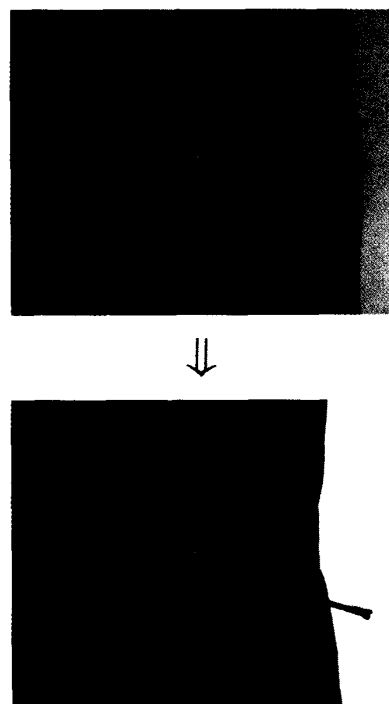


写真9 ドレス切り替え位置の縫製

召しを思わせる感触で、更に二重織物の特質を添え、且つ絞りの風合いを持っている。この浮織物は経、緯とも強撚糸を使って織り上げその後で、しばだし精練している為であろう。

“しわ”になりにくい事が認識された。

また裏地に、キュプラ100%のツイルを使用した。ツイルは斜文織であり、経、緯の糸密度も大で組織自体独特の弾力性がある。こうした裏地の特性が、表地の補助効果となり、デザイン上のシルエットを保つ結果となった。

3) 縫製面から

おはしより位置切り替え線の縫製は、写真9に示す通りである。強度と弾力のある極細い幅のリボンを二重にして使用し、腹囲の仕上がり寸法を中心とし、左右にそれぞれ数ヶ所閉止めをする。これを、ボタンホール替わりとしウエスト寸法の調整をする事にした。また、総体的には接着芯を効果的に使用することにより、美しいシルエット作りや、メーカーアップ性も得られた。接着芯のアピコは基布にニットを使用している為、伸縮性がありしわになりにくく、やわらかい風合いで仕上げる事ができた。他に、接着テープを併用することにより造形効果を上げ、縫製も合理的に行うことができた。

2 合理性について

交通に便利であり、しかもT. P. Oに合わせた着装が可能である合理的なドレスを目指し

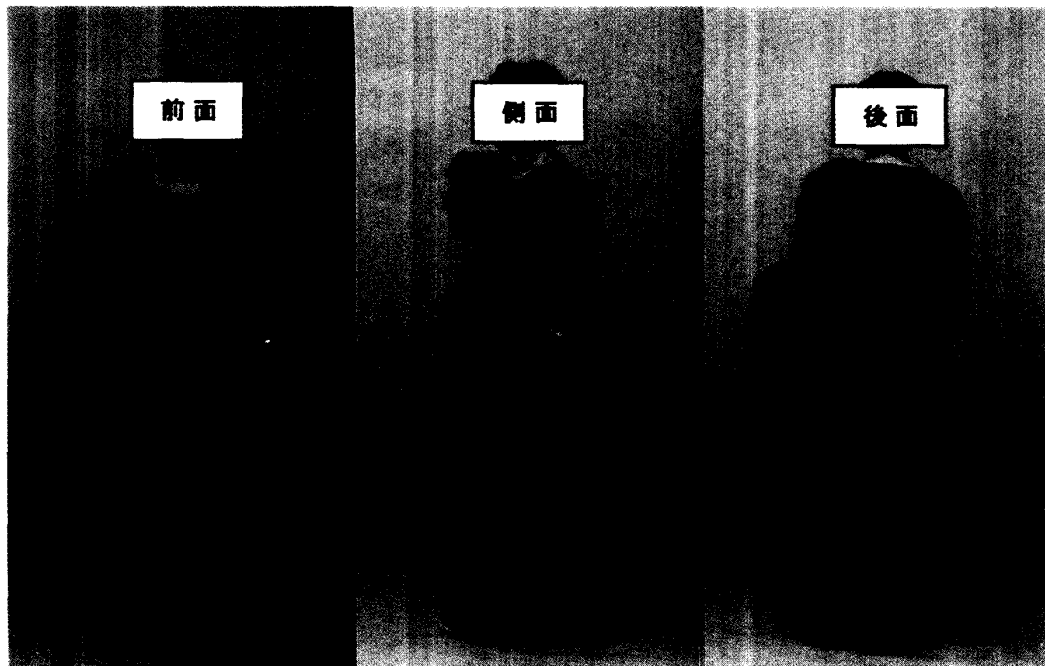


写真10 ワンピースの仕上がり

研究してきた。従前の研究成果から、更なる合理性を素材面に求め、経済性を焦点として和服のリフォームに限定したその為に、デザイン上の制約を余儀なくした。しかし、今回別布を補足することにより、デザイン面での許容範囲が広がり、ファッション性と機能性を融合したドレス形態を求めることが出来た。

完成し、着装した写真10はワンピース・ドレスである。ジャケットを脱いで気温差に対応する着装ができ、フォーマルドレスとしての利用期間が長くなる。また、仮縫い時にデザイン変更した衿ぐりの切り替えは、ボートネックの保型性という点で効果を上げ、さらにアンサンブルとしての統一感を増した。

写真11のアンサンブル・スーツは、スペアーカラー・コサージュにより、コーディネートが楽しめるよう工夫をしたものである。スペアーカラーにより各種の表情が楽しめる事や、ジャケットの袖口を折って変化を付ける。また、コサージュを付けることで違った雰囲気をかもし出す事が出来ると共に、ノーマル丈でもロング丈でも着装が可能である。

要 約

従前の研究結果で和服のリフォームは、内容的に構想と技術面の合致は難度の高い物であったが、機能面、形態面、素材面を融合した合理的なフォーマルドレスとして製作ができた。しかし、和服布地による“しわ”が課題であり今回そこに焦点を当てた。他方、ファッ

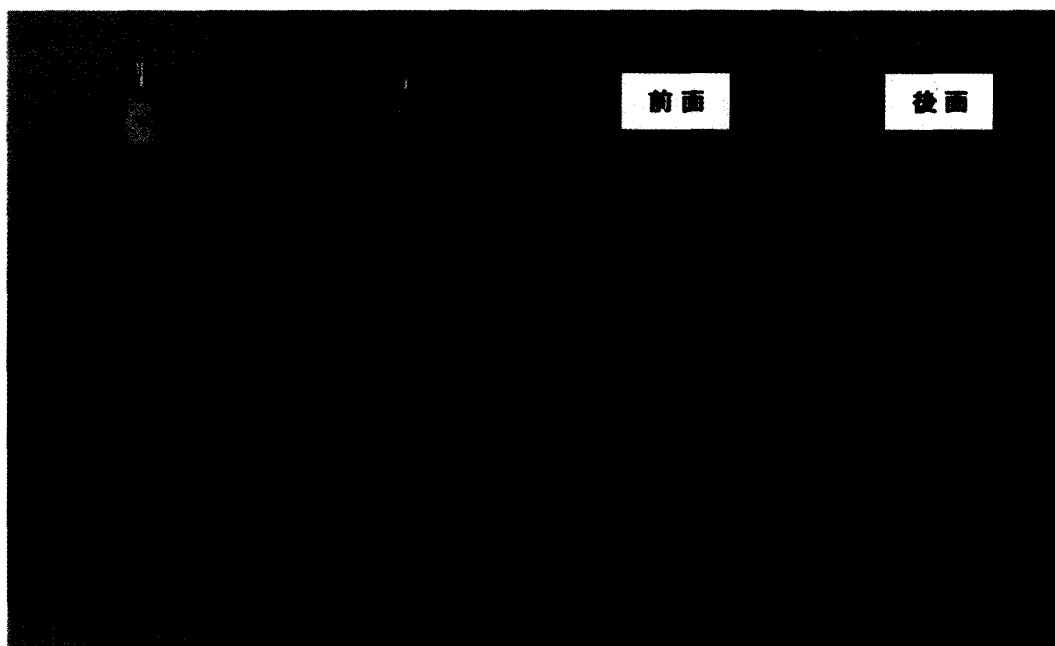


写真11 アンサンブル・スーツの仕上がり

ション面も考慮した。

和服のリフォームは既に裁断されたパーツが、おおむねスタンダードな寸法と形態である事から、体形とデザインとファッションの相関関係に於て難しく考慮した点である。前者は素材に意を用い、絞りのような風合いを持つ浮き織物にしたことでしわについてはほぼ解消した。後者では、別布を補充したことでファッション性を踏まえ、美的な造形が充足できたと思われる。技術面でも、前回研究の示唆を得て損耗した布への対応ができ、形成、構成、補助効果など造形面での効果を詳細に把握できた。今後、作品の着用を出来るだけ多くし、管理も含めて検討を加えたいと考えている。

本研究の製作物は平成11年5月、日本服飾学会において展示発表したものである。

文 献

- 1) 裏地と芯地 関西衣生活研究会 (1991)
- 2) 山本政, 増田純子: 和洋女子大学紀要 37 217~229 (1997)
- 3) 山本高美, 山本政: 和洋女子大学紀要 37 231~241 (1997)

山 本 高 美 (家政学部服飾造形学科助手)

山 本 政 (家政学部服飾造形学科教授)